

近世服飾史における更紗について

佐藤 泰子*

The Calico Painting and Printing (Saraça) in Japanese Modern Ages.

Yasuko Sato

緒言

I 更紗伝来への緒言

——語源・発生・伝播など——

II 日本における更紗

——移入のこと、および展開・用法——

1. 資料 文献資料

絵画資料

2. 考察 第1期 伝来更紗

第2期 舶載品記録

第3期 展開・流布

結語

緒言

1. (目的)

公家装束の下着であった白小袖が表出化し、庶民の日常着であった筒袖が上級化して、一体となり、色小袖、模様小袖へと発展し、江戸時代は、服飾史の上では、小袖文化と称せられるほどの隆盛をみた。そこには、服装形態上、着袴形式から小袖帯への形式、すなわち、二部式構成から一部式構成へ、そして、装束から小袖へという大きな変革があり、そのような簡略化の結果生み出された表面装飾の問題が、染織界

の発展につながった。

一方、服装および風俗というものは、社会および時代を無視して語ることはできない。島国であるわが国の文化史を通視するとき、1. 大陸文化の影響(朝鮮半島, 中国) 2. 南蛮文化の渡来, 3. 幕末開国による欧米化 4. 第二次世界大戦後の国際化と、たえず外来文化の移入→吸収→消化→同化の経過をたどって進展してきたといえる。

そこで、前述の小袖文化の開化期、16世紀末のわが国は、信長、秀吉の全国統一により、応仁の乱以後、約1世紀にわたる戦国の世に終わりを告げ、ひさびさの安らぎの中で、出雲の阿国にはじまる阿国歌舞伎、湯女などに見られる女性風俗のごとく、民衆の間にも、のびやかに、華やいた文化が展開された、いわゆる桃山文化の頃である。

そのとき、はじめて西欧人の渡来を受けた人びとの驚嘆はいかなるものであっただろうか。本研究は、いくつかの舶載品のうち、更紗に着眼し、その動向を服飾文化の中に把握しようとするものであり、さらに、究極的には、日本染織の発展過程について、社会および服飾のさまざまな角度から掘り下げて、発生および相互の関連の明確化を求めるものの一片である。

2. (研究の現段階と本研究の対象及び方法)

更紗については、大正10年代、新村出博士の幾多の、特異な論述中『南蛮更紗』、『南蛮広記

* 本学講師 日本服装史

抄』、『続南蛮広記抄』、『更紗散録』などに、かなり詳細に言及され尽され、それをほとんど抜んじ得ないようである。しかし、その歴史的、民俗学的、文学的見解は、あくまでも、言語学上の考察であり、服飾文化の相互関係の中には把握されにくい。

そこで、本研究では、文書・書簡・日記に記された史的記録、文学書などの文献資料を中心に、事例に際し、実物資料および絵画資料を含めて、それらを論拠とし、服飾史上の考察を試みようとするものである。

I 更紗伝来への諸言

1. 更紗とは

江戸時代の文献『紅毛雑話』(天明7)には、“金巾又ハ絹布ノ片面ニ五彩ニテ種々ナル模様ヲ押し染メタルモノ云々”とある。今日の辞書にも『広辞苑』、『大言海』、『広文庫』、『大日本国語辞典』など、大体そのように記している。

金巾とは、平織綿布の意で、インド、マラヤム語の Kandaki、タミール語の Kandānqi より葡語化して、Canequin となり(リンスホーテン『イティネラリア・東方案内記』1595、文禄4)、『和漢三才図会』(正徳3)では、“西洋布”と書いて“カナキン”と読ませている。“西洋布”の文字は『更紗図譜』(天明5)、『絵入日用女重宝記』(弘化5)など、当時の文献に頻出している。

更紗の文様に関して、『広辞苑』では、人物・鳥獣・花卉とし、『外来語辞典』(角川版)では、草花模様・幾何学模様とし、『和漢三才図会』では、“……用茜染花文……”となっている。

技法的には、捺染で、手描き・型とともに含まれるわけである。

2. 語源

更紗の語源は、江戸の文献にさまざまな通説があるが、その後、蘭語または英語か(大槻文彦,『学芸志林』第14巻第81冊,明17)葡語(村上直次郎,『史学雑誌』第14編第10号,明36)印

度スラタの転語(斎藤阿具,『歴史地理』第25巻第2号,大4)と論述され、今日の『葡語辞典』(GRAND DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA9)には“Tecido fino de algodão……Ter da India……”すなわち、インドよりの綿布と出ている。しかし、現在のところ、蘭、言語学者、ケルンは、“古爪哇語、くまんべんなく撒布したる”の意でモザイク模様のパティックをいふ”(リンスホーテン『航海記』)、さらに“ジャワ古語のSasah<散布>に中接詞erがはさまって、S-er-asah<散布されたもの>の語形を生じた”(『服装大百科事典』,斎藤正雄筆)といい、蘭、南方学者、ルーファーはこれを受けて、“爪哇語、草花文模様”(新村出『南蛮広記抄』、『更紗散録』)とし、“インド東海岸、タミール地方の染色調査の報告書『蘭嶺芸術誌』の中の、tapi sarasa, sarasa gobarsという古語は蠟染めの意味ではないかと述べている”

(『ジャポニカ』,山辺知行筆)。また、英、ジョージ・ベーカーも、“彼の著書、『印度描更紗図譜』(Calico Peinting and Printing)に爪哇古語、草花文撒布の意”(新村出『南蛮広記抄』)とし、“印度が蘭嶺法の発祥地である”(明石染人『染色文様史の研究』)としているので、不確定ながら、更紗の語源はジャワにあり、インドではかなり古くから、そのような染色が行なわれていたと見てよいであろう。

3. 発生・伝播

そこで、このあたりの古記録を拾いあげてみると、

B.C.3000 インドにて綿布織成(モヘノジョダロの発掘品より)。

2000 インド、パンヌ地方より型染に使用された型板と推定されるテラコッタ(Terracotta)の幾何学模様の陶版出土。

同 コーカサス地方にて描画・型染による布地装飾。

400 黒海クリミヤ地方の古墳よりギリシアの手描更紗出土(ヘロドトスの記録)。

A.D. 100 エジプトにて媒染剤使用による染色

が行なわれていた（ローマの博物学者、
プリニウスの記述）。

300 エジプト、コプト人により人物模様藤
瀬更紗の作成（フォーラ、アークミンよ
り発見、英国、ビクトリア・アンド・ア
ルバート博物館蔵）。

635 スコットランドにて僧侶のインド染衣
服の禁止（僧聖カスバートの記録）。

900 エジプト、アークミンから藍防染麻布
宗教画出土。

1000
1539 印度産のサラサ20端をアール地方から
マラッカに來た使節に贈与（ピントウ
『冒険航海記』1614、リスボン刊）。

1595 ジャヴァ、マヨル島にて香料と交換さ
れるものとして……サラサ・デ・ガバ
ル 注1……カンパヤ産の黒いカネキン
注2 赤いトゥリャー 注3などをあげてい
る（リンスホーテン『東方案内記』）。

注1. sarasses de gabares 上掛け、
覆布。

注2. cannequin 安物の衣料、金巾。

注3. turiae ダボル（インド西海岸ボ
ンベイの南）産の花模様の更紗木綿
の一種。

17C初 コルコンダ王国、特にマスリパタム付
近で作られ、土語で、カルマンダ（cal-
mandar ペンのような）と呼ばれる描画
のチンツは、敷物・卓子掛け・カーテン
・手巾に作られるほか、ペルシアに輸出
され腰衣とされた（仏、宝石商、ダベニ
エの『インド旅行記』）。

1658 ヨーロッパ（セントゲルマニア）の市
場にインド更紗、はじめて登場。

1663 シャー・ジャハン王宮の光景を描いた
マスリパタム産の描き更紗の美しさを記
載（仏、旅行家、ベルニエ）。

1686 ペルシアにはインド更紗と同様の描画
布のあることを記載（仏、ジャン・シャ
ルダン『ペルシア旅行記』）。

同 仏、独にて、インディオンヌス（Indien
nes、ヨーロッパ製模造更紗）の流行に

抗議し、型染用木版の廃棄処分令発令。

1687 仏、型染製品販売の禁止令、違反者には
罰金3000ルーブル。

1690 仏よりの避難工人、英国リッチモンド
に最初の型染工場開設。

1691 スイス、蘭、アルサス、葡にも禁令。

1705 仏、寺院王宮にて秘密買売。

スイス、蘭、英にて密輸品の搬入。

1759 政治問題、社会問題上、いっさいの更
紗禁令撤廃。

注 文化服装学院出版局編『服装大百科事典』
上（斎藤正雄筆）、小学館『ジャポニカ』
（山辺知行筆）、日本繊維意匠センター編
『世界の更紗』1、2 参照。

以上のように、インド、エジプト、ペルシア
の古代文明の中に生きた更紗は、近世、ヨーロ
ッパの東洋進出により、ヨーロッパ各地に広が
り、盛況の余り、旧体制維持のための禁令が出
されるほどに伝播されたのである。

4. 用途・文様・技法

インド更紗

ヒンズー教では、神像の上に張る幕の帷^{とぼり}、
神話・伝説に由来する人物文（図1-5
日本繊維意匠センター編『印度・東南アジアの更
紗』より転写 略号ゴチ㉔）

イスラム教では、祈禱用の敷物（パランポ
ール）、生命の木に鳥獣花文（図1-6㉔）
手描および型染

ジャワ更紗

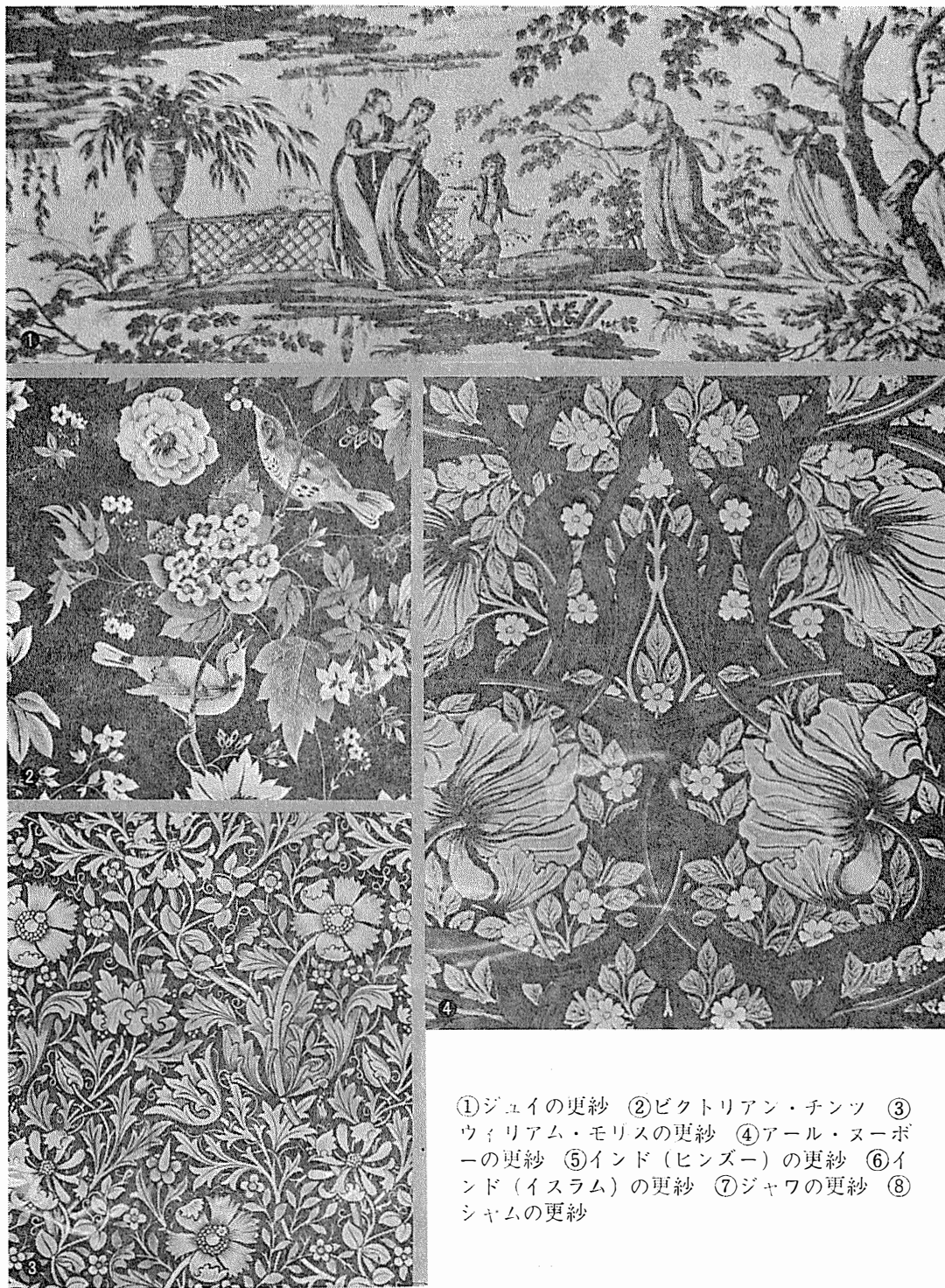
国王の保護のもとに上流貴婦人の手工芸と
して発達し、サロン（腰布）カインカパラ
（頭巾）スレンダン（肩掛）などの衣料と
され、斜め縞、格子、石畳、禪などの幾何
学文、蘭染（図1-7㉔）

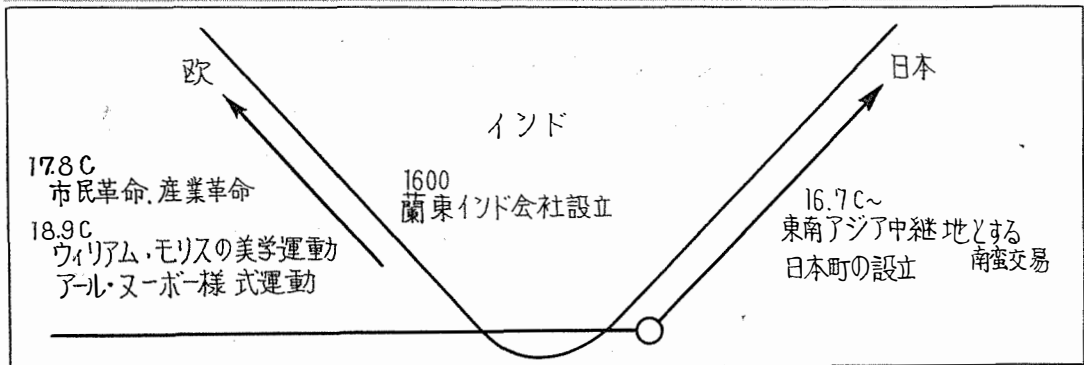
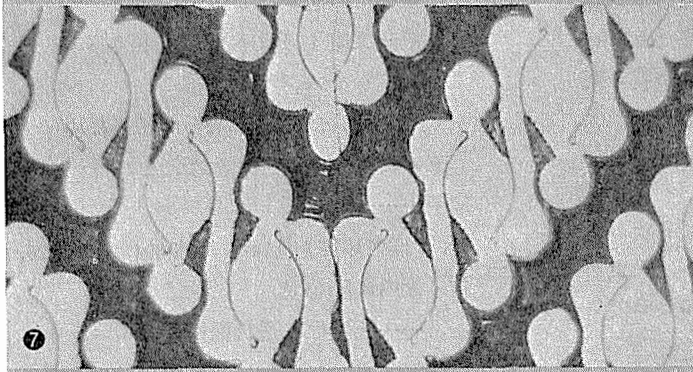
シャム更紗

仏教寺院を中心に発達し、宝珠形花文、火
焰文、菩薩文、金属筆による手描および蘭
染（図1-8㉔）

以上、これらは、時代的、地域的に、主とし
て神仏と人との交渉であったが、1600年オラン

図1 更紗に関する南蛮交易と東西文化の動向





ダの東印度会社設立、1613年英国に更紗の輸出許可とともに生産は急増し、量産の必要から手描は型染に移った。一方、ヨーロッパでは、貴族社会の崩壊、市民革命、産業革命と相続き、それまでの高価な紋織に代わるものとして、更紗は大変な勢いで流行した。その需要は、カーテン・椅子張・ベッドカバーなど室内装飾品に向けられ、やがて、19世紀、英国でビクトリアンチンツと呼ばれるもの（図1-2 日本繊維意匠センター編『ヨーロッパの更紗』より転写 略号ゴチ㊸）、また仏にては、ナポレオンより、その業績を称えられて“レジオン・ド・ヌール”の勲章を受けたジュイのオーベルカンフ（Oberkampf）の更紗（図1-1㊸）を生み、さらに、英国、ウィリアム・モリス（William Morris）の“美術工芸は一部特権階級のためのものではなく、一般大衆の中にあり、用になかった造形様式でなければならない”と提唱する美術工芸運動や、仏にはじまり、ベルギー、伊、オーストリアに波及したアール・ヌーボー運動、またセセッション運動と呼ばれる、過重をおさえて自然で柔軟かつ動的な曲線構成、単純の中の躍動感の構成を、そのまま平面に表現したヨーロッパの更紗（図1-3.4㊸）は、化学染料の発見、ブロック・プリンティング・マシーンの改良により、今日、なお、インテリアの中に生き続けている。

ここに、南蛮交易を通じてわが国にもたらされた更紗の源流および動向をたどる中に、東西文化の交流と、その同異性の概要を知るのである。

Ⅱ 日本における更紗

1. 資料

文献資料

まず、論の中軸となる文献資料の引用を、年代（年号）、書名、著者名とともに、時代順に列挙する。

1. 1539（天文8）『冒険航海記』（1614.リ

スボン刊）

マラッカにて、印度産のサラサ20端をアール地方からマラッカにきた使節に贈与。（幸田成友『日欧通交史』第1章・葡萄牙人の日本発見より）

2. 1543（天文12）（同）

ピントウの一行は、海賊に襲はれ、さらに3日間吹続く暴風で支那の沿岸から離れ、23日間海上を漂流し、漸くにしてタンスマア島（種子島）に到着し、島主ナウタキン（種子島直堯 1528—79）に面会、以後、日葡通商貿易開始。（同）

3. 1547（天文16）ザビエルから大内義隆に贈られた布のこと。

- a. 大航海叢書X『日本教会史』下 第17章 ジョアン・ロドリゲス。

福者パードレ・フランシスコはインディアとマラッカからいくつかの品を持参したが、その中にはマニコルディオ1台 歯車時計1個、葡萄酒とエスパーニャ製の織物その他があり……。

- b. 東洋文庫4『日本史』1 第5章、ルイス・フロイス。

そこで、ばあでは王に贈るために十三の貴重な進物を選んだ。それは……緞子……。

- c. 『群書類従』第14輯、巻第394、合戦部26、「大内義隆記」。

……天竺仁ノ送物様様ノ其中ニ。十二時ヲ司ルニ。夜ル昼ノ長短ヲチガヘズ。響鐘ノ声ト。十三ノ琴ノ絲ヒカザルニ。五調子十二調子ヲ吟ズルト。老眼ノアザヤカニミユル鐘ノカゲナレバ。程遠ケレドクモリナキ鏡……五サマ送りケルトカヤ。

- d. 『日欧通交史』第1章 幸田成友。

……平戸に帰ったザビエルは、……葡萄牙の織物、葡萄酒……等十三点を領主義隆に上った。

4. 1595(文禄4)大航叢海書Ⅷ『東方案内記』第20章, リンス・ホーテン。
ジャヴァ, マヨル島およびその物産,
商品と取引き衡法, 通貨とその価格, そ
の他特殊なことについて
……サラサ・デ・ガバル……トウリ
ア……
5. 1615(慶長20)「史学雑誌」第14編 第9
号, 附録「ロンドンの日本古文書」(大
英博物館蔵)第2, (British Museum Cart
Cott Ⅲ 13), 村上直次郎。
請取申物數之覚
1. ろなきん 但壺たんに付15匁づつ
20たん
1. さらさ 但壺たんに付10匁づつ
20たん
1. 志まもめん但壺たんに付20匁づつ
5たん
右四いろ合 ■銀子600目也
此通請取申候間為其一筆如此候已上
慶長20年9月7日
佐主馬内木寺三右衛門(章印)
ゑけれそ ろひたんさま参
6. 1616(元和2)『駿府御分物御道具帳』,
6-1, 色々絹布帳 辰極月25日の条。
1. しゃむろ
1. 5ツ ふとんしゃむろ色々
1. 5端 しゃむろ木綿
7. 1630(寛永7)平戸商館員, クーンラー
ト・クラメル日記 3月3日付
平戸侯は……さまざまな色や種類の更
紗を買上げようと申し出た……。1反に
付15マース, 合計200反である。
8. 同年, 同, 9月9日付
長崎で売られた平戸商館からの品より
……赤更紗, 1反に付33マース
9. 同年 同, 10月10日付
……上等の赤更紗 54反 1反に付2
テール(1テール=10マース)
10. 同年 同 10月11日付
……さきのノンネルと赤更紗を渡し
た。
11. 1632(寛永9)ウィルレアム・ヤンセン
の日記中, コルネリス・ファン・ナイエ
ローデの書簡, 9月20日付
……更紗2反は要望により送られ……
12. 同年 ウィルレアム・ヤンセンの日記,
11月21日付
……感謝のしるしに, 内藤伊賀守様
更紗3反他
13. 1634(寛永11)ニコラス・クーケバッケ
ルの日記, 11月12日付
……ガレット船は, 今月10日に出帆し
た。この船で, 生糸200ピコル, 反物400
箱, 赤更紗, カンガン……が来た。
14. 1635(寛永12)同, 11月29日付, 平戸侯
から総督への手紙の訳文
私は貴下にこの手紙を送り……更紗5
反……等, 貴下が遠い国からはるばる私
のところへ送ってくれた贈物に感謝す
る。
15. 1636(寛永13)同 11月1日付
今日長崎の代官平蔵殿から, ポルトガ
ル人により同地の市場にもたらされた商
品と, これがどの位の市価で売られたか
についての覚書が来た。
……更紗 21反他
16. 1637(寛永14)同 11月13・14日付
6隻のポルトガルのガレオット船によ
り, 今1637年に日本にもたらされた品物
の, 封印された覚書の訳文(布類抜粋)
100反に付
- | | | |
|------|----------|---------|
| 白紗綾 | 294,875反 | 約250テール |
| 白縮緬 | 43,828 | 244 |
| 白綾子 | 49,665 | 434 |
| 赤紗綾 | 4,101 | 512 |
| 赤縮緬 | 10,936 | 448 |
| 色物綾子 | 12,812 | 258 |
| 金色羅紗 | 4,502 | 1,054 |
| 更紗 | 66 | 2 |
| 麻布 | 29,693 | 50 |
| 赤更紗 | 7,154 | 239 |

17. 1638（寛永15）同日記中、アントニオ・ファン・ディーメンの書簡、7月12日付、
……日本式の模様の更紗100反を、我々の好意、ならびに我々と貴下との新たな友好のしるしに贈る。

18. 同年 同日記 10月6日付
……フライト船ゼーランディア号で、9月4日に澎湖島から当地に出帆し、その積荷は買入価格……グルデンで、……赤更紗……その他であることを知った。

19. 同年 同日記中、長崎代官末次平蔵よりオランダ総督へ、12月20日付
……貴下の手紙と……更紗50反の贈り物を受け……。

20. 同年 東インド会社から日本にもたらされた商品の覚書訳文（布類抜粋）

100反に付

白縮緬	52,867反	360テール
赤縮緬	15,246	550
緞子	209	800
ビロード	214	1,100
紗	4,330	300
更紗	2,000	450
麻布	83,500	100
赤更紗	2,900	230

21. 同年、『俳諧毛吹草』巻第4名物、山城叢内、松江重頼
……紗羅染（シャムロぞめ）……

22. 1639（寛永16）ニコラス・クーケバッケルの日記中、平戸侯松浦肥前守よりジャガトラの領主、総督に宛てた書簡、2月10日付
……更紗100反……の贈り物を、感謝して受け取った。

23. 同年 フランソワ・カロンの日記 7月7日付

皇帝と閣老への贈り物

閣老修理殿へ 更紗3反他

閣老甲斐守へ 更紗3反他

閣老内匠殿の息子 佐渡殿へ

更紗3反他

平戸侯の祖父オマシオ殿へ

更紗3反他

平戸侯の大叔父左門殿へ

更紗3反他

閣老大蔵殿へ

更紗3反他

平戸侯とその一党に例年の贈物

平戸侯の母へ

更紗3反他

平戸侯の妻へ

更紗3反他

平戸侯上屋敷奉行 三左衛門殿へ

更紗3反他

24. 同年 同 10月8日付

93隻の大小ジャンク船より、1639年3月24日から9月17日までに長崎の市場にもたらされ、さまざまな値段で売られた品物の封印された覚書訳文

……赤更紗 11,050反他

25. 1640（寛永17）同 1月3－6日付

平戸侯に更紗5反、色撚り糸5斤を贈った。

26. 同年 同日記中 総督アントン・ファン・ディーメンより平戸侯への書簡及び贈り物 7月8日付

……更紗 50反他

27. 同年 同日記 9月8日付

7人の閣老の取次人、及び内匠殿の取次人に、更紗1反を贈った。

28. 1641（寛永18）マクシミリアン・ルメートルの日記、7月21日付

フロイト船口木当地着、口木の積荷、……更紗 1,200反他

29. 同年 同 8月29日付

パタビア並にタイオワンからの積荷、……更紗 1,950反他

30. 同年 国史大系 第40巻『徳川実紀』第3編「大猷院殿御実紀」48巻、12月21日の条、蘭人御覧あり。貢物は……更紗……若君へ獻ず。（日記）

31. 1643（寛永20）ヤン・ファン・エルセラックの日記、8月10日付

長崎来航オランダ船積荷

- 日本のさらさ 550P (pieces ピエス)
絵入チツさらさ 6P
32. 同年 同 10月10日付
ヤハト船ワートル・ホン入港積荷,
……さらさ 200反他
33. 1644 (正保元) 同 8月30日付
バタビアからシャム経由のブーワン積荷
……さらさ 670P 他
34. 同年 同 8月31日付
バタビアからの積荷
金入チツさらさ 28P 他
35. 同年 同 10月22日付
フロイト船積荷
……ラーケン・更紗, リネンその他
36. 1650 (慶安3) 国史大系第40巻『徳川実紀』第3編「大猷院殿御実紀」巻77,
3月7日の条
阿蘭人貢物を奉る。彼国より……更紗霜降更紗……。 (『日記』)
37. 同年『通航一覽』阿蘭陀国部 巻240 同日
両上様へ阿蘭陀屋形より始て以使者進物。……さらさ20反……。
38. 1651 (慶安4) 国史大系第40巻『徳川実紀』第3編「大猷院殿御実紀」巻80,
2月3日の条
蘭人入貢す。貢物は……更紗。 (『日記』・『水戸記』)
39. 同年 同書第4編「厳有院殿御実紀」巻2, 12月8日の条
入貢の蘭人御覧あり。貢物は……霜降更紗20反……。 (『日記』『武家厳制録』)
40. 1653 (承応2) 同書同 巻5, 1月15日の条
入貢の蘭人御覧あり。貢物は……更紗1種……。 (『尾張記』・『水戸記』)
41. 同年 同書同 巻7 1月28日の条
入貢の蘭人御覧あり。貢物は……霜降花布1種……。 (『日記』・『紀伊記』・『尾張記』)
42. 1667 (寛文7) 『新撰ひながた』4下, 5下, 16上, 21下,

- ちさらさそめ
43. 1671 (寛文11) ジャガタラ文, コルネリアの手紙 (平戸郷土資料館蔵), 4月21日付
……こんどいたしました少しばかりのことずけものの覚え
ちつさらさ 2反他
右は判田五右衛門どのご夫婦へ
こるの こるねりや印
44. 1673 (延宝元) 『通航一覽』譜厄利亜国部 巻253, 5月25日の条
エゲレス船長崎入津, 持参之品々……
花大紋さらさ 2; 500反他
45. 1686 (貞享3) 『雍州府志』7, 土産門, 服器物, 黒川道祐
唐染, 暹羅染, 佐羅佐染他
46. 1687 (貞享4) 『源氏ひひながた』中巻 目録品定
おく糊盆色どる絵の具さらさ染
そめやがふちに浮舟もやふ
47. 同年 日本名著全集1, 西鶴『男色大鑑』第5巻, 2. 命乞は三津寺の八幡
……唐木綿にさらさの置形。
48. 1688 (元禄元) 「和蘭雅」V, 貝原好古 印華布 (サラサゾメ)
49. 1690 (元禄3) 日本古典全集 第3期
『人倫訓蒙図彙』6職人部,
「沙室師」沙羅沙, 沙室……
50. 1692 (元禄5) 家政学文献集『入女重宝記大成』艸田才木子 (苗村丈伯)
5之巻, 4女絹布染色の名, 万染色之名
さらさぞめ しやむろぞめ
沙羅染, 紗羅染他
51. 1693 (元禄6) 『続五元集』, 榎本其角
神は相撲にこほこほと鳴る
しやむろを外へ夜着のたゝみめ
52. 1698 (元禄11) 『合類節用集』6. 服飾門 嶺島照武
印華布 (サラサゾメ)
53. 1708 (宝永5) 『増補華夷通商考』西川如見
花布 (サラサ)
54. 宝永年間のこと『松の落葉』(文政12年

- 刊) 武江の染色尽, 藤井高尚
 シャムロから染
55. 1711 (正徳元) 日本名著全集 5 『近松名作集』下「冥途飛脚」中之巻
 ……さらさ禿がしるべして。橋がかけ
 たや佐渡屋町越後は女主人とて……。
56. 1713 (正徳 3) 『和漢三才図』27絹布類,
 寺島良安
 華布, 印華布, 佐良佐, 暹羅染, 之也
 半呂染。華布即西洋布。用レ茜染ニ花文一,
 初, 出ニ天竺, 紗羅一, 今, 出レ於ニ中華一
 者, 為ニ唐華布一, 今, 本朝多染出者, 洗
 則華文易レ消耳。
57. 1718 (享保 3) 日本名著全集 5, 『近松
 名作集』下「博多小女郎波枕」下 惣七
 小女郎道行
 ……共に泣く泣く憂き黒縹子の。絲の
 断れざる弁柄縞の。愚痴なさらさら左様
 ではないに。
58. 1720 (享保 5) 『長崎夜話草』巻 5, 附録
 長崎, 土産物, 西川如見
 しもふりサラサ, チツサラサ, ふとん
 サラサ……花手拭, 南蛮伝。
59. 1722 (享保 7) 近世風俗見聞集 第 1
 『むかしむかし物語』, 親見伝左衛門正朝
 入道法
 ……入其頃の多葉粉入は……今は金入
 のきれ緞子しゅちんのさらさ黒ぬり高蒔
 絵なる地にて, 自慢げに差出す。
60. 1732 (享保 17) 通俗経済文庫 12 『万金
 産業袋』4. 唐物類
 金巾更紗 正字印華 幅三尺九寸, 皆白地
 にて, もやういろいろ, 水にて落る事な
 し。
61. 1734 (享保 19) 『本朝世事談綺』1. 衣服,
 菊岡沾涼
 華布さらさと云, 中華より渡を唐華布と
 云也, 唐ざらさは洗へども文采落ず, 和
 染は落る也, 和染を唐へわたすに洗ふに
 文采落ず, よって珍とすと云, 唐染唐に
 てはおつる也, 其所の水による物なり。
62. 1750 (寛延 3) 『紅毛訳問答』
 サラサ木綿, 南天竺にスラタと申国有
 之, 其他の出産のよし承り候, しかれば
 スラタと申を転語してサラサと申誤り候
 か, 紅毛にはセツツと申候……。
63. 1765 (明和 2) 漂流奇談全集『南海紀聞』
 巻 5, 風俗・服象, 青木興勝
 ……サプタガンは花布条布の類……貴
 人の衣裳は多く印花布或は……。
64. 1770 (明和 7) 洒落本大系 1 『遊子方言』
 田舎老人多田爺
 たばこ入は堀安で見て置た。とんだい
 ゃよい更紗がある。それを……。
65. 1773 (安永 2) 同 2 『当世気とり草』
 金々先生
 印華布さらさの細帯蔽あばらほねをしめ,
 細毛布びるどの三徳鳥尾へさし込……。
66. 1774 (安永 3) 同 2 『婦美車紫鹿子』蓬
 葉山人帰橋
 鼻紙袋は唐さらさの小菊尺……。
67. 1777 (安永 6) 『和訓栞』中編 谷川七清
 常ニ沙羅沙ト書ケリ, 蛮国ノ名, 正ニ
 ハさらあさト云フ……金ざらさアリ…。
68. 1781 (天明元) 黄表紙『女郎買糖味噌汁』
 市場通笑
 銀の煙管, 更紗の煙草入, 小菊の鼻紙
 羽織の丈も長く……。
69. 1785 (天明 5) 『更紗図譜』稻葉通龍
 コンロンザラサ……カブリザラサ……
 南京ザラサ……。
70. 1787 (天明 7) 洒落本大系 6 『通言総籙』
 山東京伝
 前垂れのかわりに更紗の風呂敷を帯へ
 挟み……。
71. 同年, 同 6 『田舎芝居』万象亭
 柳にけまりにぶうぶう貝を染たるもめ
 ん衣裳は, いんきんさらきの帯をむすび
 さげ……。
 更紗団扇をさしかざし……。
72. 同年『紅毛雑話』巻 2, 森島中良
 皿紗ハ, 南応帝イデツノ地, すらた

- ト云フ国ヨリ出スト云々……和ざらさ…
…印華布、花布、金ざらさ、銀ざらさ、
描金花布
73. 1795（寛政7）『譚海』14 津村正恭
印花布さらさはとうみん也、紋を印に
して布にをす、織ものゝごとし、南京よ
り渡る、えびす国よりも来る、日本にて
洗へども少しもはげず……。
74. 1798（寛政10）『十界和尚話』4
唐更紗の襯衣
75. 1800（寛政12）酒落本大系8『青楼真廓
誌』松葉亭
更紗の襯衣
76. 1825（文政8）燕石十種『我衣』加藤玄
悦（曳尾庵）（没年）
さらさの足袋、金巾の足袋
77. 同年『御触書天保集成』下 5106、酉年
2月付
近来軽きもの芳、ころふくれん、さら
さ等帯其外ニモ相用候由、右体之儀は致
間敷筈ニ候処……。
78. 1830（文政13）同 下 5107 寅年12月付
近来軽きもの芳、ころふくれん、さら
さ等帯其外に用候趣ニ付、以来相止可申
旨、去ル酉年中申渡置候処、今以心得違
之者も有……。
79. 1835（天保6）有朋堂文庫『百家琦行伝』
八島春信、狂歌師、更紗孫右衛門の更紗
の間のこと
80. 文政天保の頃『近世風俗志』第12編、男
服上、喜多川守貞
華布俗に広更紗と云……三都ともに男
女晴着略服の時の下着に専レ之……。
81. 1837（天保8）同書 第17編、織染 同
唐さらさは……近世これら平襪俗ニ云
風呂敷に専用す。
82. 1848（嘉永元）同書 第30編、雑器及襪
同縫取り更紗……以之紙入煙草入に製
すること流行す。

絵画資料

1. 西川祐信（1671—1751：寛文11—宝暦元）
“柱時計と美人図”（絹本着色）の帯（?）
2. 勝川春章（1726—1792：享保11—寛政4）
“風俗12ヶ月 11月雪の炬燵”の炬燵掛
ふとん
3. 喜多川歌麿（1753—1806：宝暦3—文化6）
下着、掛衿、帯に更紗らしきもの

2. 考察

資料中、1630～40年代、平戸および出島の交
易による舶載品記録に見られるごとく、その頃
漸く盛んにもたらされたものと見なされ、考察
の観点を次の期に区分する。すなわち、第1期
伝来、第2期 平戸・出島舶載品記録、第3期
展開・流布とする。

第1期 伝来

前記資料中、更紗の語出典の最古を資料1に
求め、日本との関係を資料5に求める。資料3、
4はそれ以前の関連事項である。

ここで、ポルトガル人ピントウ漂着、鉄砲伝
来にはじまる日葡交通以前、すでに、西欧と交
流のあった東南アジアと、日本との関係につ
いて（新村出著『続南蛮広記抄』『史林』発表 大13、
選集2「日本晴」収録「暹羅の日本町」参照）この
あたりを詳しく究明することによって、資料1、
3の前進および資料6に見られる“しゃむろ染”
の問題も解明の可能性を見い出す。なお、しゃ
むろ染の最古記録を新村著『南蛮広記抄』で
は、後述の資料21「毛吹草」に求めているが、
ここに22年の前進を見、また、辻善之助著『海
外交通史話』37. 西洋文明の影響より“家康の御
道具帳に……更紗 Saraca（葡語）”と記されて
いるが、原本の絹布帳には見あたらない。

第2期 平戸・出島舶載品記録

西欧と東南アジアとの交易が盛んになるにつ
れ、その影響はわが国にまでおよんだ。すなわ
ち、葡人漂着について、フランシスコ・ザビエ
ル、ルイス・フロイス等の宣教師を迎え、1596

図2 日本の更紗



①更紗煙草入・巾着 ②更紗継縫小袖 ③同部分拡大 ④更紗ふとん

年（慶長元）イスパニア船サン＝フェリッペ号
士佐浦戸に漂着，1600年（慶長5）オランダ船
リーフデ号豊後に漂着，1601年（慶長6）フィ
リッピン総督安南国王に朱印船制度創設の通
告，1603年（慶長8）カンボジアに朱印船制度
創設の通告と相次ぐ中で，次第に西欧文化の波
におし寄せられていった。

このときもたらされた2つの問題，すなわち
外国商船の来航と，キリスト教の伝道という問
題に対し，信長は両者を，秀吉は前者のみを受け
入れ，家康は，両者とも制限・抑圧の態度をと
った。家康の場合の外交政策は，国情の乱れる
のを恐れ，宗教的色彩を持たないオランダのみ
に絞り，1609年（慶長14）5月より幕末まで，
長崎の平戸および出島に限りその入航を許可し
た，いわゆる鎖国体制である。そこに設立され
たのがオランダ商館であり，その記録が，商館
日記また，蘭館日誌と呼ばれるものである。そ
れはオランダの東インド会社が貿易計画をたて
るうえに必要なこととして，各地の商館に命じ
たもので，初代商館長ヤックス・スベック（
1610—1613）以来歴代商館長の日記が記された
筈であるが，現存するものは，8代商館長ニコ
ラス・クーケパッケル（1633—1639）以後14代
のハブリール，ハッパルド（1653—1654）まで
のもので，その間，1641年（寛永18）5月には，
港が平戸から出島に移されている。これを集成
したものが，永積洋子著『平戸オランダ商館の
日記』1～4 及び村上直次郎著『出島蘭館日記』
上 中 下 であり，舶載品の記録とは，資料7
～35中，上記文献の抜粋をいう。

そこで，資料より次のようにまとめる。

種類・更紗，赤更紗^{注1} 絵入チツさらさ 金
入チツさらさ^{注2}

数量・毎回の入荷反数はさまざまで（1反～
11,050反）相対的な数値の明示は困難
であるが，年々かなりの数であること
は読みとれる。

価格・以下のような順位で高価値をもつ。

1. 羅紗 2. ビロード 3. 綸子・縮緬・
緞子，4. 更紗，5. 麻・木綿

注1. 更紗と赤更紗の価値について

はじめ赤更紗のほうがかなり高価であ
ったが（資料16），1年後には約半値に
下がってしまうのは（資料20）それほど
変動的なものであったのだろうか。

赤更紗について

『長崎市史』風俗編下第13章童謡より
“アカットバイ カナキンバイ オラン
ダサンカラモロタトバイ”を起想する。

注2. チツとは，ヒンドウ語 Chint=peint
描くの意で，前述のごとく英国更紗の呼
び名ともなっており，オランダ船によっ
てもたらされた東西文化の交流を再び思
う。また，この語は資料コルネリアの書
簡中にも記されている。

第3期 展開・流布

このころになると，更紗の見出しは，文学書ま
た通俗辞典の中に具体的な用途をみるようにな
る。それをみるに，小袖・襦衣・下着・細帯・
足袋・衣着・ふとん・手拭・風呂敷などの服飾
品付属品，財布・多葉粉入・鼻紙袋などの袋物
として用いられている。また，正徳・享保の頃
には，和製のものもでき，当初のものは水洗に
より脱色することが資料56，61に見られる。

こうして，この期ようやく民間に流布しはじ
めたその背景を次のように考察する。

まず，文化史上，江戸時代を次の4期に区分
する。

1. 慶長（1596—1614）
 } 大名風俗
 万治（1658— 60）
2. 寛文（1661— 72）
 } 町人風俗（上方）
 寛保（1741— 43）
3. 宝暦（1751— 63）
 } “（上方+江戸）
 享和（1801— 03）
4. 文化文政（1804— 29）
 } “ （江戸）
 慶応（1865— 67）

そこで、舶載品は、はじめ武将及び大名の珍重品であり、当然ながら庶民生活の中には入り得なかった。やがて、町人が財力を形成し、それが可能となり得た頃、最も華やかな時期の小袖の展開があった。それは、綸子・縞子・紵など光沢のある布、絵画風の総模様、あるいは寛文模様と称せられる大柄のもので、その後町人の奢侈禁令の中で、宝暦の頃、裾模様（「賤のおだ巻」）、明和末から天明の頃、裏模様（「反古染」）や、大変な手数を要する総絞りに移り、かかる変遷においては、更紗が小袖として登場するのは、その珍奇さのゆえにわずかに雛形本にその例をみるが（資料42、46）、しかし十分な場ではなかった。とはいえ、それは表向きの姿で、実際には度重なる禁令を犯して今日に残された美事な小袖も数多く、江戸の豪商、越後屋呉服店（三井家）旧蔵品のひとつ“更紗継縫の小袖及び共帯”（図2-2,3 文化女子大学所蔵 略号ゴチ◎）^{*}、歴史の裏を生きた貴重な資料といえよう。しかしながら、延宝の末の豪商の衣裳競べの例（「武野燭談」）、また元禄の頃の花見幕の例（「紫の一本」「上野の花見」の条）からみても、豪商の財力の限りなき様相に、三井家の更紗小袖も、さほどではないのかもしれない。

資料76、77は、舶来染織品の民間流布への禁止令であるが、逆をいえば、前述のごとき用法の頻繁であったことを物語るものである。

江戸時代の袋物は、収集愛好家の間に比較的多く、実物に触れる機会も多い。（図2-1◎）また、ふとん類も、絵画資料2（図2-4 小学館『原色日本の表術』17、浮世絵より転写）に示すごとくである。絵画資料1、3について、确实性に乏しいとしているのは、衣裳の色彩および文様表現がそれらしくあっても、質感、つま

り技法が不明確であり、あるいは縫、または織かもしれないという疑念を抱くからである。この点に関しては、文献資料で十分足りるものであるから、さらに解明の必要もないものと思われる。

以上を見出資料による3期の考察とする。

結語

日本における更紗の概要を、Ⅱより次のようにまとめる。

表1

	世 態	体 制	更紗に関する事項
①	戦乱終了 泰平の謳歌	西洋文明の 摂取	更紗伝来
②	江戸幕府の 成立	鎖国体制	商館より 移入
③	町人文化の 繁栄		民間流布
		奢侈禁止令	表を地味に、下着半衿に金銀を投ずる傾向の中で、小袖としてよりも服飾付属品に
いたずらな華美から渋み、粋の美へ			

上表②③を展開させるためにも、①の問題をさらに詳しくきわめる必要性を痛感する。具体的には、紗羅染（砂室染・紗羅染）と更紗のこと、琉球交易による紅型の影響、京型と称せられるものと伊勢型紙による江戸小紋のこと、そしてそれら相互の関係であり、さらに茶屋染、慶長裂との関連、友禅染への影響など、江戸の小袖文化展開に関する命題の限りなきを痛感する次第である。